



特集 再考・乳幼児期の
からだづくり



卒園制作の登り台は見上げるほどの高さで挑戦心をかきたてます。

たり、跳んだり、引っぱったり、投げたり、蹴ったり、立ち止まったり、急に方向転換したりと、毎日、じつに多様な動きをしながらあそんでいるはずですが、しかも、何といても「あそび」なので「楽

しい」が前提です。あそびが盛り上がるれば盛り上がるほど、楽しさは増し、あそぶ時間も増え、そこに知恵や工夫が加わり、技術的にも向上していきます。現に、マット運動や体操などの体育指導を受

「やってみてみたい」と思える環境と達成感を味わえるように

当園でも、子どものからだづくりを大切に考えていますが、体育指導のようなことはしていません。とにかく「あそび」を大事にしています。子どもが自らあそびたくなるような環境や「やってみてみたい」と思える環境を用意してあげたいと考えています。

たとえば、当園には一見して、「乳幼児には危ないのでは？」と思うような手作りの園庭遊具があります。敷密には「登り台」として作ったのですが、「スベリ台」にもなります。卒園する子どもたちと卒園制作として一緒に作ったものです。

初めて見る人は、「子どもが落ちたりしないんですか？」と心配

当園は、定員四〇名の小さな保育園です。熊本市の西部にあり、東側の市街地とは金峰山という標高六六五メートルの山で隔たれ、西側には島原湾が広がります。河内町地域は古くからみかんの産地として知られ、保育園のまわりも見渡す限りみかん山です。このように自然環境にはとても恵ま

楽しいあそびこそが大切

近年、子どもたちの運動能力がかなり低下しているといわれています。こうした話題になると、「うちもスイミングスクールに通わせようかしら」とか「うちはサッカーを習わせているから大丈夫」と思われる保護者のかたも多いかもしれませんが、しかし、それぞれのスポーツでは、そのスポーツに必要な

な動きを中心に練習するため、全体のバランスからいうと偏ったものになりがちだと聞いたことがありますが。

その点、保育園などで行うあそびは、鬼ごっこひとつとっても、それこそ数えきれないぐらいのルールが存在し、とにかく、いろいろなあそびが楽しめます。走っ



竹馬を操り、並んだ平行棒の上を歩いていきます。

夢中であそんで、身につく力

熊本県・河内からたち保育園園長 初瀬基樹

れています。町の過疎化に伴い、地域の子どもの数は減り続けています。

とくに目玉になるような保育はしていませんが、「健康でバランスのとれた心とからだの発達を促す」を保育目標のひとつに掲げ、「心」と「からだ」をしっかりと育てていきたいと考えています。

*日本保育学会第65回大会実行委員会シンポジウム 二〇二二年



特集 再考・乳幼児期の
からだづくり

はしごの下の段が外れており、登れるようになったら小屋の2階であそべます。



夢中になってあそび、 いつの間にか身につく力

んとからだでわかるようになっていくからだと思います。「危ないからやめなさい」ではなく、「何が危ないのか」「どうすれば危な

くないのか」を子どもと一緒に考えていくことが大切だと思います。



夢中になってあそぶことで、さまざまな力が身につけていきます。

幼児期の子どもの育てるには「夢中になってあそんでいたら、いつの間にかいろんな力が身につけていた」というのが理想だと思います。泥んこあそびをしながら、水と砂の混ぜ具合による硬さの違いや、山を作るときの固め方など、さまざまな「加減」を身につけたら、積み木や泥だんご作りに夢中になるなかで、「集中力」や壊れてもあきらめずに繰り返し「挑戦する力」などを育ててほしいと思います。

また、鬼ごっこやリレー、ドッジボールなどを通して、ルールを守らなくてはあそびが面白くなくなることを理解し、友だちと協力する、作戦を立てる、助け合うと

いった協調性なども育まれていくことでしょう。たくさんあそべる子どもは、好奇心が旺盛で、何ごとに対しても意欲的です。学校にあがって、さまざまなことを学んでいくうえで、大切なのは、こうした「好奇心」や「意欲」「集中力」、そして「楽しさ」をみつければいいと思います。これらを幼児期に育てておきたいのです。具体的に目に見える成果を求めるよりも、まずはこうした基礎、基礎づくりのほうが大切だと考えています。

です。そうして得ることのできる「やってみないけど、ちょっと怖い」「できるかな？ 失敗したらどうしよう」というハラハラドキ

ドキ感と、できたときの何ともいえない達成感。どの子にも味わわせたい体験です。

「それやっちゃダメ」を できるだけいわない

あそび体験の少ない乳幼児の場合、危険を回避する力が弱いので、当然、おとながきちんと見守る必要があります。しかし、「危ないから」と、何でもかんでも子どもたちのまわりから危険を取り除いてしまつたら、危険を回避する力は、いつまでたつても育たないままなのではないでしょうか。「危険を察する力」、「自分にはどれぐらいのことができるのか判断する力」、「いざというときの身のこなし」、「敏捷性」、「粘り強さ」、「精神力」、「失敗したときの痛み」などなど、これらは昔のわんぱく少年たちなら、あそびのなかでさまざまな経験を積み、知らず知らずのうちに身につけて育つはずなんです。しかし、現代社会では、こう

した経験をする場はほとんど失われ、今の子どもたちには、おとなが意識して用意してあげなければならぬいほです。

ですから、当園では、できるだけ「それやっちゃダメ」ということはいわないようにしています。園内の木や高いところにも平気で登ったりしています。ただし、はしごの下のほうの段段をわざと外しておくなど、「自分の力で登れない子は上であそべない」といった配慮をしています。おにいちやん、おねえちゃんや友だちが楽しそうにあそんでいるのを見ると、自分もやってみようと思うときます。下手におとなが手



手作りのクライミングウォール（よじ登るための突起をつけた壁）も卒園制作。

伝って登らせてしまうのではなく、一生懸命チャレンジして、自分の力で登れるようになるまで見守るような心がけています。自分の力で登れるようになる頃には、不注意で上から落ちるといったこともほとんどありません。どうしたら危ないのかが、さち